混合(上)

　　Puney　Loran Seapon

【凛と絵里からのおしらせ】

絵里「この作品は、作者が過去に投稿した作品、『弾丸』『変態』『恋愛』『友達』がコラボした、クロスオーバー作品です。それらの作品の続編ってわけじゃないのよ」

凛「そうそう。だから、私たちが読者に向かって話しかけても、全然おかしいことじゃないんだよね！」

絵里「そうそう。あったかい目で見てもらえると、割と助かわね。作品自体は真面目に書いているわけだし。あ、これ作者の言い訳を代弁しているわけじゃないから」

　凛「過去の作品を読んだことがない人は、この作品は楽しめないの？」

絵里「過去の作品を全部読んでくれると嬉しいけど、時間的に無理って人は、【あとがき】を最初に読んでくれれば、作品のあらすじと、登場人物の情報くらいは分かるんじゃないかしら？　まあ読んだことなくても、なんとかならなくもないんじゃない？」

　凛「それなら大丈夫だね、おにぃちゃん、おねぇちゃん！」

変態(？)

　呼吸の度に薄らと景色が白く曇る、今日この頃。新米刑事のは、つい最近、ようやく交際を始めた幼馴染のまゆみと一緒に、商店街で夕飯の買い物をしていた。しかし、付き合い始めた若い二人の表情は、早くも倦怠期を迎えたカップルのような、深刻なものだった。なぜこのような表情なのか、その理由は二人の間で違う。

　勇気が深刻そうな顔をしているのは、つい先日、とあるホテルで発見された高校生位と思われる女性の刺殺体が原因だ。遺体の身元が分からず、今捜査中なのだが、状況はあまり芳しくない。身元を確認出来るような物を持っておらず、今は周辺の住民等に聞き込みを行っているのだが、何の手がかりも掴めていない。ホテルには監視カメラもないため、犯人の特徴も分かっていない。現場の状況から、おそらく犯人は一人だろうということと、殺害されたのは、おそらく数週間前だということが分かった程度である。事件の発覚からまだ数日しか立っていないが、既に勇気はクタクタだった。実は今も捜査中なのだが、偶然買い物の途中だったまゆみに出会い、聞き込みと称して、こっそりサボっている。もちろん罪悪感はあるのだが。

　一方、まゆみがこのような表情をしているのは、勇気が原因だ。今、勇気と交際していることに、まゆみは憤りを感じていた。いや、もちろんまゆみとしては、勇気と交際している事については嬉しい。ただ、未だに交際の域を抜け出せていないことが問題なのだ。

『俺と、結婚してくれないか？』

　これが、勇気の台詞だったはずだ。しかし、まゆみはまだ勇気と結婚していない。同居はしているが、勇気の家にちょくちょく行っていたまゆみにしてみると、前とあまり変わりがない。

「はぁ……」

「はぁ……」

　視界が二人分、白くなる。

「ん？　まゆみ、なんか悩みでもあるのか？」

　勇気がまゆみの方を見た。

「……うっさい」

「……？」

　不機嫌そうにそっぽを向くまゆみに、勇気は訳が分からないというように首を傾げる。

「ところで勇気」

　少し機嫌を直したのか、勇気の方を向くまゆみの表情は、少し柔らかい。

「後残るは夕飯の買い物だけなんだけど……」

　そう言われて、勇気は自分の持っている買い物袋の中を覗き込む。中は雑貨。おそらく絵里か凛に頼まれた物であろうと、勇気は推測した。

「今日の夕飯、勇気は何がいい？」

「まだ決まってなかったのか？」

「ううん。でもせっかく勇気と会ったんだし、何かリクエストがあれば聞くよ？」

「パッとは思いつかないな……。何が作れそう？　いくつか挙げてもらって、その中から選ぶわ」

「じゃあ、今家にある物とか考えると……肉じゃががいい？　コロッケがいい？　それとも……」

　まゆみが上目づかいで自分を見る、そんな錯覚を勇気は感じた。ぴょこぴょこと、まゆみのアホ毛が揺れた。

「わ・た・し？」

　不意に、後ろから男の声が聞こえた。どこか面白がっているような、そんな声。勇気もまゆみも、この声の主を知っている。

　その声が少し大きかったせいか、周りの人が何事かと勇気達の方を見る。クスクスと笑い声も聞こえてきて、勇気もまゆみも慌てて後ろを振り返る。白衣を着た男が、ニヤニヤしながらそこに立っていた。

「藤二、何の用だ？」

　勇気が尋ねたその男は、科捜研の。勇気とまゆみの、中学生時代の友達だ。科捜研と言ったが、彼は仕事をよくサボって、勇気の邪魔……いや、手伝いに来るような奴である。

「つーか、男があんまり気持ち悪いこと言ってんじゃねーよ！　背筋がゾクッとしたわ！」

「藤二君、久しぶり。っていうか、私そんな破廉恥なこと言わないし！」

「やだなあ、二人共。『藤二』なんて水臭いじゃないか」

　ちっちっちと、人差し指を横に振りながらウインクする藤二。まゆみの最後の発言はスルーするつもりらしい。

「昔みたいに『ＴＯＵＪＩ』って呼んでくれよ」

「一度もそう呼んだことないだろ……」

　溜息を吐きながら、勇気はそう呟いた。横で、まゆみがリアクションに困っていた。

「それで、何か用か？」

「用も何も、勇気君が仕事をサボっているのを見たから、注意しに来たんだよ。ダメじゃないか」

「サボっていたのは事実だが、お前に言われたくねーよ！　お前もさっさとの仕事戻れ！」

「いや、別にサボってはないさ」

　勇気の発言に、藤二は首を横に振る。だが、他の科捜研の方々は、既に鑑識から届けられた遺留品や証拠品の鑑定をしているはずで、当然藤二もその場にいなければならない。こんなところで油を売っている暇はないはずである。

「『天才は時として、何もしない方が良い結果につながる』っていう名言があるじゃないか。僕はサボっているように見えて、ちゃんと仕事をしているのさ」

「『名』言っていうか、『迷』言だね……」

　どう反応していいか分からない、そんな表情で、まゆみは呟いた。

「と、いうのは半分冗談で、本当は勇気君や康介君の手伝いをしに来たんだよ」

「冗談は半分だけなんだ……」

「だいたい、別に手伝ってもらう必要無いっつーの！　それに、お前一人が増えたって、たいして変わらんだろ」

　そう言って、勇気は溜息を吐く。藤二がいると、いつもの倍疲れるので、さっさと帰って欲しかった。

　だが、

「大丈夫だって！　新しく発明した人型ロボット、『立ち上げろ！　君のぶんし……」

「某カードゲームアニメの、有名な台詞をパクってんじゃねーよ！　却下だ却下！」

藤二はたまに、よく分からないものを作る。大抵は、使い道の分からないものばかりだが。勇気は溜息を吐いた。

「だいたい何なんだ、それは？」

「聞き込み捜査に必要な人員をどうしても削減したくてね。そのためのロボットを作ったんだ。まだ開発の途中だけど、簡単な聞き込み捜査なら、多分出来なくもないと思うよ？」

「そんなもの使えるか！　どうせ、また爆発とかするんだろ？」

　いつかの『時計型銃』を思い出しながら、勇気は藤二に尋ねる。

「ええっと……作動させてから十分くらいすると」

「却下だ！」

　藤二が全部言い終える前に、勇気はそう言った。街中で、そんな危ないものは使わせられない。藤二は衝撃を受けているが、勇気はそれを無視した。

「そんな！　爆発するなんて言ってないじゃん！」

「ん？　じゃあ、危険はないのか？」

「危険も何も、普通のロボットだよ？　頭の部分が、まるで本物の人間そっくりに出来ている他は、ただの鉄の塊が服を着ているだけだって！」

　藤二は慌てて説明する。写真まで出す始末だ。

「じゃあ、作動させてから十分経つと、どうなるんだ？」

　その写真を覗き込みながら、勇気は藤二に尋ねる。思っていたより、見た目は問題無い。服を着ていれば、遠目からならロボットに見えない気もした。もしかすると、今回は問題ないかもしれないと、勇気は思う。

「どこかの黒ひげみたいに、首から上が上に吹っ飛ぶだけだよ？」

「そんなもん使えるか！　トラウマになるわ！」

　街中で首が飛び出る光景を想像した勇気は、顔を真っ青にして藤二に怒鳴る。ケラケラと、藤二はそれを笑い飛ばした。

「笑い事じゃないっつーの！」

「まあまあ、冗談だって。普通に聞き込みをしようか、勇気君」

「お前は来なくていいっての……あ、悪いまゆみ」

　勇気は、そばで呆然と二人の話を聞いていたまゆみに話かける。

「俺、聞き込みに戻るわ。夕飯はなんか適当に頼む。荷物は俺が家に持ってくからさ」

「えっ……ちょっ……勇気っ？」

　呆然とするまゆみを置いて、勇気と藤二は捜査に戻った。

友達(？)

　呆然と、私はその場に立っていた。私はまゆみ。木村勇気の幼馴染で、最近交際を始めたから、今は勇気の彼女だ。

「ちょ……あいつ、ほんと何なのよ……」

　せめて夕飯のリクエストくらいはして欲しかったけど、仕事だから仕方がない。仕方がないけど、私は少し腹立たしかった。まあ腹立たしいのは、別に夕飯のリクエストをしてくれなかったことだけじゃないけど。

『大人になって、ちゃんとお金がもらえるようになったら、結婚しよう』

　そう言われたのが幼稚園の頃。つい最近まで、勇気は自分が言ったその台詞を忘れていたけど、私はずっと覚えていた。幼稚園の頃の話だから、勇気が忘れていたのは、それは仕方ないことだと思う。流石にショックだったから、思わず引っぱたいた事もあったけど。問題は、勇気が告白したのを思い出した、その後だった。

　勇気が言うには、結婚は慎重にしなければならないものらしい。

「最低でも五年の交際を経て、結婚はそれからだろう？」

　あの勇気の言葉。今思い出しても腹立つ。確かに結婚は慎重にする必要があると思うけど、今更交際する必要なんて私たちにはないんじゃない？　知り合ったばかりってわけじゃないんだしさ。

私は溜息をついて、空を仰ぐ。一面灰色で、まるで今の私の心境をそのまま写し出しているかのようだと、私は思う。少し前までは、所々に青い色が見えていたはずなのに。ふと、幼稚園児位の女の子が、私のそばを通りかかった事に気がついた。なんとなく、アルバムで見た、昔の私に似ているような気がする。頭のてっぺんから、主張するように伸びたアホ毛といい、少しつまらなさそうにして、お母さんと手をつないでいるところといい、目に入ったのは一瞬だったけど、思い出せば出すほど、ますます似ていると思った。

　勇気との出会いを、実は私はよく覚えていない。幼稚園に上がるより前には既に、私の隣には、よく勇気がいたような気がする。はっきりとした記憶があるのは、年中組に上がった頃からだ。

あの頃の勇気は喧嘩早くて、よく周りの子とトラブルになっていた。私はといえば、取っ組み合いの喧嘩にこそならなかったものの、あまり素直な子じゃなかったから、やっぱり勇気と同じで、よく周りの子とトラブルになっていた。そのせいか、あの頃の私は、勇気以外の友達がいなかったように思う。いつごろからだろう？　私に、勇気以外の友達が出来るようになったのは。ジャングルジムの頂辺で、勇気に告白された頃にはすでに、他にも友達が少しいた記憶がある。

そんな幼い頃の記憶を思い出しながら、私は夕飯の買い物に行こうと、後ろを振り返る。その時だった。

「きゃっ！」

「あっ……ごめんなさい！」

　私は、女性とぶつかって、相手を転倒させてしまった。清純派美人という言葉が、良く似合いそうな子で、ふと、私は目をこすった。ぶつかったのが、彼女一人じゃないような気がしたから。でもそれは気のせいで、ぶつかってしまったのは彼女一人だけだったらしい。私は慌てて、その子に手を差し伸べた。

「大丈夫？　怪我無い？」

「だ……大丈夫です……」

　彼女は私の手を掴んで、ヨロヨロと立ち上がる。

「す……すみません、私も不注意でした……」

　彼女は本当に申し訳なさそうに、私に頭を下げる。自分が悪くなくても、きちんと謝るその姿は、勇気にも見習って欲しいと、つい思ってしまった。勇気は、自分が悪いと思わないと謝らないから。悪いと思ってても、素直に謝らない時もある。

　でも、ちゃんと謝る勇気も、それはそれでどうなんだろう？

「あっ……あのっ、どうかしました？」

　彼女にそう言われて、私は初めて、彼女をじっと見つめている事に気がついた。どうやら無意識のうちに、彼女を観察していたらしい。何がそうさせるのか、私には分からなかったけど、きっと彼女の目に惹かれるのだろうと思う。とろんとした目の中に、彼女のものではない何かを私は感じた。

「あ、ああっ、ごめんねっ？　何でもないから……」

　私は慌てて、彼女から目を逸らす。そうしないと、いつまでも彼女を見てしまいそうだったから。

「……？」

　不思議そうな様子で、彼女はこの場を去ろうとしたその時、私は地面にハンカチが落ちている事に気が付いて、それを拾い上げた。多分、彼女のものじゃないかなと思う。可愛らしい花柄のハンカチで、裏には『天瀬響花』と書かれている。彼女の名前かな？

「あの、これ落とした？」

　私が呼び止めると、彼女は振り向く。私の持っているハンカチを見て、自分が落としたことに気がついたらしい。驚いたような表情で、今度は私を見た。

「あっ……ありがとうございます」

　雲と雲の隙間から、薄らと赤い光が差し込んだ。

変態(？)

「藤二のやつ、どこ行きやがった？」

　あたりをキョロキョロ見回しながら、木村勇気はそう呟いた。まゆみと別れた二人は、結局藤二も一緒に聞き込みをしていたのだが、気がつくと、藤二の姿はどこにも無い。聞き込みには確かに邪魔な存在だったが、いざ本当にいなくなると、存外寂しいものだと、勇気はつい感じてしまった。

「……メールか」

　ふと、内ポケットのスマートフォンが振動する。メールが届いたようで、開くと差出人は藤二だ。

『犯人と被害者の目星が付いた。康介君と一緒に、ここに向かって欲しい』

「なんでブタと一緒に？　まあいいか」

　本文を読み終えた勇気は、思わずそう呟く。メールには地図が添付されていて、一箇所、赤い丸が付いていた。ここに向かってくれということなんだろうと、勇気は推測する。

「あれ？　勇気君じゃあないか。奇遇だねｗｗｗ」

　突然声を掛けられ、振り向くと、そこには勇気の同僚の、通称ブタがいた。ダサい丸縁メガネを掛けた太っている男で、髪の毛もだらしなく伸びきっている。気温が低いから、メガネもいつもの二割増に白く曇っていた。

「ネット用語を現実で使うなと、何回言わせりゃ気が済むんだ？　いい加減直せ！　このブタ野郎！」

　「ｗｗｗ」というのは、ネット用語の一つである。意味は『(笑』を略したもので、康介が最も多用するネット用語の一つだ。

「『ブタ野郎』だって？　ホント笑わせてくれる……」

「そのネタ、パッと聞いて分かる奴あんまりいないだろ・・・・・・。ところで、メール見たか？」

　勇気は、さっき届いたメール画面を康介に見せる。スマートフォンの画面が、康介の息と体温で白く曇った。

「ああ、これかｗｗｗ　見たね」

「んじゃ、行くか」

「うむ」

　そう言って二人は、一緒に歩きだした。寒波が二人の背中を押す。目的地に記されていたのは、とある高校。あまり評判の良くない高校だった。

弾丸(？)

「らっしゃいませー」

　気のない挨拶だと自分でも分かっているが、人間、どうしてもやる気が出ない日もある。今の俺が、まさにそれだ。

　入ってきた母親とその娘を見ながら、俺は羨望を覚える。別に結婚願望がある訳ではないが、ああやって母親に欲しいものをねだる子供を見ていると、もっと真面目に生きていれば良かったと、つい思ってしまう。ねだられている母親からすれば堪ったものじゃないんだろうが、ねだってくれる相手すらいない俺からすれば、ちょっと寂しい。

　殺し屋稼業なんてしていなければ、俺にも子供がいたかもしれない。

「あの、すみません」

　そう呼ばれて、俺は我に返る。さっき入ってきた母親が目の前にいた。カウンターには、商品が置かれている。

「あぁ、すいません。えっと、８２０円になります」

　お金を受け取って、お釣りを渡す。

「あざしたー」

　気のない挨拶をしながら、俺は時間を確認する。この後、依頼の打ち合わせがあるのだ。約束の時間が刻一刻と迫るのを見て、俺は溜息を吐いた。

「それじゃあ、こいつが今回のターゲットだ」

　とあるオフィスで、俺の目の前にいる、スキンヘッドのおっさんが写真を一枚、俺に差し出す。このおっさんは、俺の上司だ。俺を殺し屋稼業に引き込んだ張本人である。

　暖房のお陰で暖かく快適なオフィスとは裏腹に、俺の気持ちは冷たく不快だった。

「こいつが……次のターゲット？」

「ああ」

　写真に写っているのは女性だった。それも、彼女は多分大学生、いや高校生にも見える。おっとりとした感じの子で、とても殺す必要があるようには見えない。俺は、自分の手が震えている事に気がついた。

「……まだ子供じゃないか。こんな子を殺すのか？」

「ああ、頼む」

「……理由を教えてくれ」

　もう何十年も殺し屋稼業をやっているが、未だに人を殺す感覚には慣れない。慣れたくもない。とても、彼女を殺す気にはならなかった。

　おっさんは、俺の事をじっと見つめていた。理由を教えるか否か、迷っているようだ。

「以前お前が殺した、アパレル会社の社長を覚えているか？　ほら、竹岡を殺す前の」

「ん？　ああ、あの社長さんか？　覚えているけど？」

　一応、俺もプロの殺し屋だ。ターゲットの顔は、全て覚えている。敬意という訳ではない。殺しておいて、綺麗さっぱりと忘れてしまうのは、相手に対して申し訳ないと俺は思っているからだ。

「実はあの時、目撃者がいた可能性があるんだ」

「なんだってっ？」

　人を殺すのは嫌だ。殺すことに快感を覚えるやつの方がどうかしている。だが、サツに捕まってブタ箱に入れられるのは、もっと嫌だ。俺は自分の顔から、サッと血の気が引いた事に気がついた。

　だが……。

「おかしくないか？　一体どこからだ？」

　俺があの日、狙撃のポイントに選んだのは、廃ビルの屋上だ。しかも、あの日の時間帯は深夜午前零時。目立たないような服を選んだから、よほどのことがない限り、俺の存在に気づかれるはずもない。廃ビルから出入りする時が一番可能性があったのだろうが、行動も迅速だったはずだ。

「それに、あの社長さんを殺したのは、二ヶ月以上も前の話だろう？　目撃者がいたなら、とっくに警察が俺達に勘付いてもいいはずだと思うが？」

「そんな簡単な話じゃない。これを見て欲しい」

　おっさんはそう言うと、机の脇にある新聞を俺に渡す。一昨日の夕刊だ。

「ここだ」

　おっさんは、新聞の隅っこの方を指差す。都内のブティックホテルで、高校生位と思われる女性の刺殺体が発見された、という記事である。

「少し気になって調べてみたら、現場のホテルは、あの廃ビルの近くのホテルだった。そして発見されたのは先日だが、その女子高生が殺されたのは、どうやら数ヶ月前らしい。つまり、分かるな？　この女を殺した犯人が、お前の姿を目撃している可能性があるんだよ。だから……」

「ちょっと待ってくれ」

　俺は、話を続けようとするおっさんを手で制す。

「確かに目撃したかもしれないが、まだ俺の姿を見たって決まったわけじゃない」

　今のおっさんの話を聞いただけでは、そいつが目撃したという可能性は極めて低い。俺と彼女の犯行日時が、たまたま一緒だったとは考えづらいだろう。

「それに、なんで犯人がこの子だと断定出来る？　警察はまだ、犯人が誰なのかまで掴んでないんだろう？　それどころか、遺体の身元すら分かってないじゃないか」

　俺はターゲットの写真を指差して、そう言った。だが、おっさんの表情は硬い。

「……俺の倅が、殺害された女と同じ学校に通っててな。この間、この夕刊を倅が見て、同じクラスの女子が殺されていた事に気がついたらしい」

　もっと早く気がつけよ、と、俺は思う。クラスメイトがいなくなって二ヶ月以上経っているのに、気づかないとはどういうことであろうか。

「引きこもる子や、学校サボって遊んでいる奴が多いんだよ。お陰で倅も、そいつがいなくなっても不思議に思わなかったらしい」

「……なるほど」

「それで、殺されたその女は、ひどいいじめに遭っていたようでな。まあ、うちの倅も色々とやらかしたらしいんだが……。ただ一人、その女にはとても仲のいい友達がいた。それがこいつだ。そして、こいつも同じ時期に、行方をくらましている。おそらく、こいつが犯人と見て問題ないだろう。証拠は何もないが」

　おっさんはそう言って、写真を指差す。

「と、いうことは、殺された彼女は、ひどいいじめに遭った挙句、友達だと思っていた奴に裏切られたって訳か」

　ひどい話だなと、俺は思う。それにしても、人は見かけによらない。殺人なんてしそうにないように見えるんだが。しかも、女の子二人でブティックホテルか。確かにその手のホテルは、殺人を犯すには条件のいい場所だが。

「しかも、行方をくらましたその時期が、丁度お前が社長さんをぶち抜いた日のあたりらしいんだ。分かったか？」

「……分かったよ」

　まだ彼女が俺の姿を目撃したと決まった訳ではないが、可能性は低くない。ブタ箱に入れられるくらいなら、口封じをする必要がある。俺は、腹を括った。

「はあ……」

　思わず、俺の口から溜息が漏れる。おっさんと別れてから、俺は寄り道せずに、まっすぐアパートに戻った。六畳一間の狭苦しい和室。築数十年のオンボロアパートに、俺はもう何年も住んでいる。

　殺し屋という職業に就いているので、年収はそこらの人達の倍は稼いでいると思う。住もうと思えば、もっといいアパートに住めるだろう。だが、人を殺して得たお金で、贅沢をするのは気が引ける。……とはいえ、耐震性は危ういアパートだから、そろそろ引っ越してもいいかと、最近思い始めてはいるが。

　殺し屋なんかやっているものの、正直なことを言えば、俺は人なんか殺したくない。そんな俺がなんで殺し屋なんてやっているのか、それには訳がある。簡単に言えば、大学で遊び呆けていたら二回も留年して、就職も出来なかった。路頭に迷いかけていた俺に声を掛けたのが、あのおっさんで、めでたく俺は殺し屋に。これが理由だ。今思い返しても、何とも間抜けな話である。ちなみにさっきのコンビニは、俺が殺し屋の仕事をしに行く時、アルバイトの振りをして入るコンビニだ。たまに本当にアルバイトをすることもあるが。あまり客はこないから、アパートから直で仕事に行くより、いろいろとごまかしやすい。

　思わず愚痴ってしまったが、俺が溜息をついた理由は、今手に持っている写真だ。二枚ある。一枚は、今回のターゲットの写真。もう一枚は、殺された女子生徒の写真。

　話の最後に、おっさんから、こんな話を聞かされた。

「今回のターゲットの女の名前だが、俺の倅に聞いたところ、たしか『』でいいらしい。よく覚えていないらしくてな、もしかすると『』という名前だったかもしれないとかなんとか……。男みたいな名前だろう？　俺も訳が分からないんだが、何せ、うちのバカ息子の事だ。クラスメイトの名前など、いちいち覚えていないんだろう」

　クラスメイトの名前くらい、全員覚えろよ。一体どんなクラスだったんだ？

　結局、その時のおっさんの話をまとめると、刺殺体と犯人の名前が『天瀬響花』と『須藤響一郎』のどちらかであるらしい。片方が男みたいな名前だが、その点はスルーするより他ないか。

　殺された女子生徒の気持ちを考えると、気分が沈む。本でも読んで、気を紛らわすか。そう思った時、チャイムが鳴った。

「……誰だ？」

　おっさんとはさっき別れたばっかりだし、他に訪ねてくる人に心当たりはない。警察か何かかと、俺は訝しむ。

「……げっ！」

　覗き穴から外の様子を覗いた俺は、思わずそんな声を出してしまった。

友達(？)

　背中がゾクッとする。私は、後ろから視線を感じた。

　彼女と別れてから、私は夕飯の買い物を済ませ、まっすぐ家に帰る。勇気と交際するようになってから、私の帰るところは、勇気の家になっていた。ただ、この日は実家に取りに行くものがあったから、今日はちょっといつもと違う。私の実家は、勇気の家の、ほとんど真正面に位置するところにある。この家に入るのも、久しぶりだ。

「ただいま」

　私は家に入って、そう告げる。だけど、誰かが「おかえり」と返してくれることは、ほとんどない。この日もそうだった。ずっとこの家で過ごしてきたけど、そのことを気にしたことは最近ではほとんど無い。

　でも今日は、なんだか少し寂しい気がした。空気も、なんかいつもと違う。自分の家じゃないみたいだ。勇気の家なら、凛ちゃんや絵里さんが「おかえり」って返してくれるからだろう。勇気の家と比べると、私の家の方が狭いはず。確か、随分前に勇気がそう自慢していたから。だけど多分、あいつの方が間違っているんじゃないかな。だって、こんなに広く感じるだもん。

　早く勇気の家に戻りたくなった私は、用事を済ませて、さっさと玄関まで向かった。その時だ。

「……誰かな？」

　ドアの外に、人の気配を感じて、私は首を傾げる。ドアを開けると、そこにはさっきの女の子が、今まさにチャイムのボタンを押そうとしているところだった。驚いたような表情でこちらを見ているが、多分私も同じ顔をしていると思う。

　オトメユリの甘く濃厚な香りがした。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　【続く】

　　　【あとがき】

　お久しぶりです。Puney　Loran Seaponです。今回は前編なので、あんまり書く事はありません。詳しい話は後編で。そういえば、まだクロスオーバーをやっていなかったと思い、書きました。書く事はこれと、この後のあらすじや登場人物の紹介だけですね。まあ折角クロスオーバーするなら、読んでて楽しい方がいいだろうと思い、まえがきとあとがきはあんな感じです。クロスオーバー含め、嫌いだったらごめんなさい。あと、まえがきで二人が言っていましたが、四作品の完全な続編という訳ではないので、その点はご了承を。

　では次からは、あらすじや登場人物の紹介です。

【あらすじ】

『弾丸』

　俺は殺し屋。といっても、人を殺すのはあんまり好きじゃない。そんな俺に舞い込んできた依頼は、自殺志願者からの依頼だった。だがそこには、依頼主の思惑が潜んでいて……？

『変態』

　新米刑事の木村勇気は、変質者の捜査をしていた。同僚の佐々木康介、科捜研の古谷藤二と共に、変質者を捕まえることは出来るのか？

『恋愛』

　前作『変態』からの続き。幼馴染の伊藤まゆみに、なんか引っぱたかれた勇気は、その理由を考える。最後に勇気が出した結論とは？

『友達』

　私の名前は須藤響一郎。こんな名前ですが、私は女です。

いじめられていた私に差し伸べてくれたのは、天瀬響花という、一人の女性でした。それが……私はとっても嬉しくて――

　……ネタバレしない程度に書いたら、こうなっちゃいました。作品それぞれ読んでくれると嬉しいです。

　　　【登場人物】

『「弾丸」の主人公』

　殺し屋。文字通りただの人殺し。

「別に殺したくて殺してるわけじゃないんだがな。就職出来なかったから、仕方なく、だ」

　『木村勇気』

　新米刑事。刑事としては普通。彼氏としては最低。

「おい、なんだそれ！　もっと他にないのかよ！」

　『佐々木康介』

　ブタ。こんなんでも彼女がいるリア充。あとドＭ。

「ブタって……言い方に刺があるね。彼女がいるのが羨ましいのかい？　ｗｗｗ」

　『古谷藤二』

　変人。誰も『ＴＯＵＪＩ』って呼んでくれない。

「皆、影ではちゃんとそう呼んでくれているんだよ！」

　『伊藤まゆみ』

　勇気の彼女。可愛い。まあ、頑張ってください。あと、早く逃げて。

「な……何から？」

　『須藤響一郎』『天瀬響花』

　どっちかはヤンデレ。

「あの……なんで私から逃げるんですか？」

　以上、登場人物です。凛と絵里は割愛します。ごめんなさい、二人共。